Title	南宋時代における道教の神への加封：廬山と茅山の事例を中心に
Sub Title	The official granting of the additional titles to taoist deities in Southern Song China : concerning the case of Lushan and Maoshan
Author	酒井, 規史(Sakai, Norifumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.13 (2020.) ,p.39- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20200331-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南宋時代における道教の神への加封

——廬山と茅山の事例を中心に——

酒井規史

一、前言

宋代において、人々が信仰する神々が靈驗あらたかであれば、朝廷が称号をあたえて信仰を公認することが行われていた。それにより、宗教信仰の管理と信徒たちの人心の掌握をはかったのである。また、朝廷からあたえられた神々の称号（以下、朝廷が称号をあたえることを「賜号」、さらにあたえられた称号を「封号」と称す）は、文字数の多少によってランク付けされていた。ある神を奉ずる信徒たちにとって、封号の文字数が増え、ランクが上がること（以下、封号の字数を増やすことを「加封」と称す）は榮譽なことであった。賜号と加封は単純に神々の靈驗を認めるというだけでなく、時には宋朝と信徒たちの間の利害関係を反映するものでもあった。

宋朝から賜号された神々の中には、もちろん国家公認の道教であった道教の神々もふくまれている。宋朝は道教

の神々に災厄をはらう力を求め、国家の保護に役立つ神であると認めれば賜号や加封を行った。また、皇帝と神を奉ずる道士たちが親密な関係にあった場合、神に対する加封という形で道士や所属する道観の格上げをして、いっそう手厚く保護をしたようである。

南宋時代における道教の神に対する加封については、『廬山太平興国宮真君事实』と『三茅真君加封事典』という文献が残されており、道教の代表的な聖地である廬山（江西省）と茅山（江蘇省）を舞台にした加封について詳細を知ることができる。特に後者の『三茅真君加封事典』は、タイトルがしめす通り、加封に関する資料がまとめられており、非常に貴重なものである。

本稿ではこれらの資料にもとづき、南宋の理宗時代における道教の神への加封について、その背景と実施の状況を考察する^①。そのことで、南宋朝における加封の実態のみならず、宋朝・皇帝と道教・道士との関係、また国家公認で挙行された道教儀礼のプログラムについても明らかにすることができるであろう。

二、宋代における道教の神への賜号と加封

本稿の主題である南宋の加封儀礼の背景として、はじめに宋代における神への賜号について概括しておきたい。先学が指摘する通り、宋代において民間信仰の神々への賜号と、神々を祭る祠廟に朝廷公認の名称をあたえる賜額の形式が整備された^②。それとともに、道教の神々に対する賜号や、道観への賜額も多く行われるようになった。

『宋史』卷一百五の「諸祠廟」の項目の冒頭は、宋朝の神々に対する姿勢を簡潔に表現している。

自開寶、皇祐以來、凡天下名在地志、功及生民、宮觀陵廟、名山大川能興雲雨者、並加崇飾、增入祀典。

これによれば、北宋時代から、宮觀（道觀）・陵墓・祠廟のうち人々に利益をもたらすもの、名山や大川でよく雨を降らすものは崇飾を加えられ、「祀典」に載せられたという。これはすなわち、それらの場所で祭祀されている神々——山川などの自然の神・道教の神仙・歴史上の人物が死後に祭祀の対象となったものなどが想定されていると思われる——が公認されたことを意味している。では、宋朝が認めた利益とは何かというと、「水（水害）・旱（ひでり）・兵（戦争）・疫（伝染病）」による災厄をはらうことが多かったようである（『咸淳臨安志』巻七十三「廣靈廟記」）。宋朝は有益な神々を峻別すると同時に、信仰の管理・統制を推進していったのである。

また、『統資治通鑑長編』巻三百三十六、元豊六年の項には神々への賜号の規定が決められた際の記事がみえる。

太常寺言、「博士王古乞、自今諸神祠加封、無爵號者賜廟額、已賜廟額者加封爵、初封侯、再封公、次封王。生有爵位者從其本。婦人之神封夫人、再封妃。其封號者初二字、再加四字。如此、則錫命馭神、恩禮有序。凡古所言皆當。欲更增神仙封號、初真人、次真君。」並從之。

太常寺博士の王古の提案により、（一）男性の神は「侯」から「公」、最終的に「王」という称号を得て、女性の神は「夫人」から「妃」に封じられる、（二）神の封号は二字から始まっていく、（三）道教の神仙の場合は、「真人」から「真君」になっていく、という基本的な賜号の形式が定まった。

道教で祭祀される神への賜号については、北宋時代初期から記録が残っている。北宋初期の太宗と真宗は、独自

の神を信仰した³⁾。太宗は翊聖保德真君、真宗は皇室の始祖（聖祖）とされる九天司命上卿保生大帝を信仰し、賜号も行っている（『宋大詔令集』巻一百三十五「天神上」）。これらの神はもともと道教の神の体系にはないオリジナルのものであり、それゆえに賜号を行い朝廷公認の神であることを示す必要があったものと思われる。

道教の神に対しては、北宋時代、すでに老子（大中祥符七年に「太上老君混元上德皇帝」）や真武（天禧二年に「真武靈応真君」）、玉皇（政和六年に「太上開天執符御歷含真體道昊天玉皇上帝」）などに賜号が行われている（『宋大詔令集』巻一百三十六「天神下」）。以下でとりあげる廬山の九天採訪使者と茅山の三茅君に対しても北宋時代に賜号が行われており、「真君」の号を得ている（詳しくは後述）。

南宋の景定二年に立てられた「宋勅賜忠顯廟牒碑」（『兩浙金石志』巻十二）には、南宋時代の賜号についての規定が記載されており、南宋の賜号制度について概要を知ることができる。まず、文中の「慶元令」（慶元年間の令）には以下のように規定されている。

諸道釋神祠祈禱靈應（謂功績顯著惠利及人載於祀典者）、宜加官爵・封號・廟額者、州具事狀保明申轉運司、本司委隣州官躬親詢究、再委別州不于礙官覆實訖、具事實保奏。

これにより、南宋時代には靈験のある道教・仏教・民間信仰の神は地方から推薦され、さらに官僚の審査を経て賜号が実現するという仕組みができていたことが分かる。また、同碑によれば、建炎三年には「神祠遇有靈應、即先賜額、次封侯、次封公、次封王。婦人之神初封夫人、次封妃、每加二字至八字止」という規定がなされ、神の称号は二字ずつ増えていき、八字を上限としていたという。本稿の主題となる九天採訪使者と三茅君の場合も、この

規定通りに二字ずつ加封が行われている（詳しくは後述）。

三、理宗の道教信仰

次に、本稿で考察する加封の背景を明らかにするため、当時の皇帝である理宗の道教信仰についても概括しておきたい。⁴ 良く知られている通り、理宗は朱子学者を登用し、廟号も朱子学概念である「理」から取られている。しかし、理宗は朱子学を信奉する一方で、道教に対しても理解を示していた。特に政治に倦んだ治世の後半は道教信仰に傾斜していき、龍翔宮や西太一宮、佑聖觀などの道觀の整備を行い、巨額の費用を使ったことが知られている。

本稿で取り上げる茅山と廬山への関わりは、嘉熙元年（一二三七）に始まるようである。九月には茅山の元符万寧宮で金籙斎と投龍簡の儀礼を行わせた（『茅山志』卷四「理宗金籙投龍玉簡詞」）。この金籙斎と投龍簡はいずれも国家・皇帝の保護と安寧を願って行われる道教儀礼である。さらに、十月には廬山の太平興国宮で靈宝道場（金籙斎を指す可能性が高い）と投龍簡を行わせている（『廬山太平興国宮事実』卷二「保國祈嗣玉簡」）。この二つの儀礼は、どちらも理宗が世継ぎの誕生を祈って挙行したものであり、その背景には理宗の後継者問題があったと推測される。⁵

理宗は前代皇帝の寧宗の実子ではなく、当時権勢を誇っていた宰相の史彌遠によって擁立された皇族の一人であった。また、即位後に寧宗の皇太子であった済王・趙竑を弑殺しており（湖州の変）、その皇位の正統性に疑問を抱かれていた。⁶ 理宗に後継者がいなければ、趙竑の血統から次期皇帝が選ばれる可能性があった。そのため、洞天

福地として知られる茅山の華陽洞天と、有名な靈山である廬山において、後継者が生まれることを祈願して道教儀礼を挙行したと思われる。その翌年の嘉熙二年（一二三三）の九月には、子の趙維が生まれている（『宋史』巻四十二・理宗本紀）。後年における道教信仰への傾斜は、この時期に発端があったといえるであろう。そして、以下に詳述するように、のちに廬山と茅山において加封とそれにもなう儀礼が大々的に行われたのである。

四、廬山における加封の事例

まず、廬山における加封の事例について述べよう。加封の対象となったのは、九天採訪使者という神である。この神は、唐末五代の杜光庭による『録異記』では「万神を弾糾」する、つまり神々を監察する神とされている。その後、以下にも述べるように、さまざまな運命をつかさどり、災厄を回避することができる司命神としても信仰されるようになったらしい。九天採訪使者は北宋の元豊四年（一〇八一）に「応元保運真君」という称号をあたえられている（『廬山太平興国宮真君事実』巻二「進應元保運號詔」）。それに続いて、南宋になって加封が実現したのである。

『廬山太平興国宮採訪真君事実』（『正統道蔵』正一部所収。以下、『真君事実』と略称する）には、理宗時代の廬山・太平興国宮の九天採訪使者への加封についての記載がある。加封は嘉熙四年（一二四〇）と景定二年（一二六一）の二回行われており、宋朝の発給した文書が収録されているので当時の状況を知ることができる。それぞれの加封について、以下に検討してみよう。

(一) 嘉熙四年の加封の経緯

それでは『真君事実』巻二・巻三にもとづき、嘉熙四年の加封について、その経緯を見てみることにしたい。まずは年表形式で事態の推移を示しておこう。また、各項目の最後には、関連する資料を示してある。

◎嘉熙元年（一二二七）

【十月】

理宗が世継ぎを求めて太平興国宮で道士二十一人に命じて「靈宝道場一昼二夜」「設醮三百六十分位」を行わせる。（巻二「保国祈嗣玉簡」）

◎嘉熙二年（一二二八）

【八月】

・太平興国宮の道士・熊守中が九天採訪使者（当時の称号は「九天採訪応元保運真君」）の加封を要請。尚書省の監査も要求。（巻二「陳乞加封奏状」）

・理宗が熊守中に命じて護国・豊作を祈るための儀礼を行わせる。（巻二「醮詞」、「上帝青詞」、「真君青詞」）

◎嘉熙四年（一二四〇）

【四月（？）】

・宋朝が加封を許可。九天採訪使者の称号に二文字（妙化）を加えて「九天採訪応元保運妙化真君」とする。（巻二「加封詰詞」）

【閏十二月】

・加封に際し、熊守中に太平興国宮で「設醮一千二百分位五昼夜」「拜奏宝章」を行わせる。また、盧山の寿聖
広福観と大中祥符観で「設醮一百二十分位」を行わせるよう理宗が命じる。(卷三「聖旨文字」)

◎淳祐元年(一二四一)

【二月六日】

・盧山の太平興国宮で「開建祈穀福時齋壇五昼夜」「拜奏宝章」「関祝周天星燈・甲子長生命燈」「満散設醮一千二百分位」が行われる。(卷三「真君祝版」「設醮意旨」)

【二月十八日】

・盧山の寿聖広福観で「靈宝道場一昼夜」「関祝星燈」「満散設清醮一百二十分位」が行われる。(卷三「寿聖広福観・大中祥符観醮意」)

この嘉熙四年の加封を主導したのは、盧山の太平興国宮の道士・熊守中である。上述のとおり、嘉熙元年に理宗は後継者を求めて盧山で「靈宝道場」(おそらくは金録齋)を行わせた。熊守中は翌年の嘉熙二年八月に加封を要求しているが、これは理宗の子・趙維が生まれる直前であり(『宋史』卷四十二・理宗本紀)、後継者誕生の実績を前提として加封を要求したと思われる。

熊守中が加封を要求する際に上奏した「陳乞加封奏状」には以下のようにある。

睹江州盧山九天採訪應元保運真君、上自三皇五帝、下至于唐、逐代易名、顯靈降祉、主天地國家之歷數、掌祖宗儲制之符圖。在昔賜額撥田、褒封祈禱、具有成典。至於禳禱水旱、弭戢兵戈、應感靈驗、載諸碑記。

九天採訪使者が古来より国家の命運をつかさどる神格であることを主張し、天候不順や戦乱を止める靈験をあらわしてきたことを主張している。国家に対する恩恵をアピールして加封を実現しようとしていたことが分かる。

この嘉熙年間の廬山の事例では、加封はすぐには実現しなかった。加封を要求したのと同様、もしくはその後に、理宗は熊守中に儀礼を行うよう命じた。『真君事実』巻二の「醮詞」には、その際に使われたと思われる理宗による青詞が収録されている。それによると、

嗣天子臣某伏為家國少寧、邊陲侵擾、師徒又戍、未收攘卻之功、宵旰靡寧、敢怠禱祈之請。謹遣上清大洞經籙道士熊守中齋香信、詣廬山太平興國宮、開壇齋事、拜伏寶章、上通宸極、以用禳兵弭寇、保國寧邦。

とあり、まず主要な関心事として、戦争から国家を守ることが挙げられている。というのも、四年前の端平元年（一二三四）に金が滅亡し、モンゴルが南宋の軍事的な脅威となったからであろう。⁽⁸⁾ また、青詞の後半には以下のようにある。

伏願九天助順、三境昭臨。消禍亂以康時、弭干戈於不戰。更冀雨暘時若、年穀豐登、萬民無疵癘之災、四海樂昇平之化。

戦乱の停止、天候が順調で豊作であること、疫病が流行しないことが祈禱されており、やはり上述のように「水・旱・兵・疫」の四つの方面に靈験を求めていたことが分かる。

加封はすぐには許可されなかったが、最終的には嘉熙四年に加封が実現し、それまでの称号である「九天採訪元保運真君」に「妙化」の二文字が加えられ、「九天採訪元保運妙化真君」となった。なお上述の通り、「九天採訪」の部分は元々の神の名前なので、「元保運妙化」の部分が宋朝から賜号・加封された部分となる。

そして、加封が実現した嘉熙四年、太平興国宮では五昼夜にわたる大がかりな醮の儀礼が行われた。また、同じ廬山にある寿聖広福観・大中祥符観でも醮が行われたという。そのことを記した『真君事実』卷三「聖旨文字」の内容からすると、宋朝からの加封が実現し、下賜品を受領したことを神に報告するものであったようである。また、その翌年の淳祐元年（一二四一）二月にも太平興国宮と寿聖広福観で道教儀礼が挙行された。この際に読み上げられたと思われる理宗の願文も残っており、その内容から、あらためて九天採訪使者に向けて国家の安寧を祈ったことが知られる（卷三「真君祝版」「設醮意旨」「青詞」「上帝青詞」「真君青詞」「寿聖広福観・大中祥符観醮意」）。

（二）景定二年の加封の経緯

景定二年（一二六一）には、九天採訪使者への加封が再度行われた。『真君事実』卷三には、その際に宋朝が発給した文書も収録されている。それらをもとに加封の推移を示すと以下のようなことになる。

◎景定元年（一二六〇）

【五月】

・史岩之が加封を要請。（「史大資申述靈驗乞加封尊冊事」）

【六月】

・戦没者の慰霊と供養のために、廬山など三カ所で「普度大醮一千二百位」を行う許可が出る。（「恭奉朝廷賜錢設普度醮密劄」）

【九月】

・陸叡が加封を要求。（「陸殿撰再奏乞頒降封冊事」）

◎景定二年（一二六一）

【五月】

知江州の印応雷が加封を許可するように要請。（「印徽猷申乞加封冊號事」）

【十一月】

最終的に加封の許可が下り、江州から太平興国官に通達される。（「江州備坐省劄」）

景定二年の加封は、史岩之の要請から始まった。史岩之による「史大資申述靈驗乞加封尊冊事」には以下のようにある。

岩之自去秋祇戌、適值胡馬透渡、被旨進黃援鄂。岩之聞命即行、但副閩事權素輕、江州又號內地、進當大敵、則無將無兵、退守中流、則城卑壕淺、舟師援鄂、則風逆莫前、增戍保黃、則星流告變。人心惶皇、士氣不振、事關宗社、未知攸濟、遂望真祠許、設普天大醮三千六百分、保國禳兵。由是天乃返風、遣援無虞。靈貺昭昭、敢忘報謝。岩之遂躬詣本宮、酬還醮願。

史岩之は開慶元年（一二五九）、鄂州におけるモンゴルとの戦争に参加した。その際、宋の水軍は風向きのできで順調に進軍できず、士気も下がっていた。そこで廬山で普天大醮を行ったところ、風向きがよくなり進軍できるようになったという。史岩之は太平興国宮を訪問して謝恩をした。その際に、宮中の碑刻を読み、建炎年間の張遇や開禧年間の吳曦など宋朝に対する逆賊に対して、九天採訪使者がたびたび宋朝を保護する靈験をあらわしていることを知る。

謹録元豊、政和詔冊、繳連在前、欲望公朝特加敷奏、付有司討論典故、於應元保運妙化今號之上加上八字徽號、尊以冊書、鏤以嘉玉、收回元誥、赴禮部架閣。不惟消弭兵災、肇開泰運、保國祚於有永、延聖壽以無疆、抑與列聖尊崇典禮不至背馳、豈勝宗社生靈之幸。

史岩之は、元豊年間と政和年間の加封の際の詔冊を同時に宋朝に提出し、同じ方式で加封を行うように宋朝に要請している。さらに、その加封を行うことで九天採訪使者が宋朝を保護することを願い、上奏文を締めくくっている。上記の年表のとおり、史岩之の後に陸叡が再度加封を要請し、印応雷が加封の許可を要請し、最終的に翌年に加封が決定した。九天採訪使者は「九天採訪元保運妙化助順真君」となり、南宋の規定では最高の八字の称号をあたえられ、道教の神としては最上位に位置することになった。

なお、加封の際にも何らかの儀礼は行われたと思われるが、『真君事実』には特に記載がない。ただし、『真君事実』巻三には「本州奉安封誥醮慶（慶醮？）意旨」と「慶醮詞」という二編の青詞が収録されており、加封を慶賀するための醮が行われたようである。おそらく、嘉熙四年の加封の際に行われたように大規模なものであったと推

測される。

この景定二年の加封の背景には、上述の通り、南宋とモンゴルの戦争が背景にある。加封の前年である景定元年には、鄂州からフビライが撤退し、鄂州をめぐる攻防戦がひとまず終わり、南宋はしばしの平和を甘受していた。盧山は係争地である鄂州に近く、戦争の最前線に最も近い道教の聖地であった。『真君事実』卷三「陸殿撰再奏乞頒降封冊事」には盧山近くの瑞昌県にも敵軍が侵入していたと記されている。また、加封の前年には太平興国宮では戦没者を慰霊するための普度の儀礼も挙行されている。この景定二年の加封儀礼は、国家の保護を神に求める当時の宋朝の意向が反映されたものといえるであろう。

五、茅山における加封の背景——司徒師坦と理宗——

次に茅山の事例について述べたい。加封の対象となった三茅君は茅盈・茅固・茅衷の三兄弟である。この三兄弟は漢代に当地で修道・昇仙したとされ、茅山の名も彼らに由来する。そのため、茅山の開祖として信仰の対象となってきた。茅山はひとつの山というよりは、主峰の大茅峰と中茅峰・小茅峰から形成される小さな山脈であるが、三茅君はそれぞれの山の神として大茅君・中茅君・小茅君と称されることもある⁹⁾。

茅山は唐代以降、道教の聖地として確固たる地位を築き、宋代においても江南における道教の名山として主要な聖地のひとつであった¹⁰⁾。北宋の崇寧元年（一一〇二）には茅山をつかさどる神である三茅君も賜号されており、最終的には大茅君は「太元妙道冲虚真君・東嶽上卿司命神君」、中茅君は「定録右禁至道冲静真君」、小茅君は「三官保命微妙冲慧真君」となったという。なお、この称号はもともとの三茅君の呼称と組み合わせられたものであり、大

茅君では「妙道冲虚真君」、中茅君では「至道冲静真君」、小茅君では「微妙冲慧真君」の部分が、宋朝によつてあ
たえられた封号である。¹¹⁾

淳祐九年(一二四九)に行われた三茅君への加封は、司徒師坦という道士が主導したものである。この加封の背
景をさぐるため、まず司徒師坦について述べてみたい。¹²⁾司徒師坦は伝記資料に乏しく、管見では元代の『至順鎮江
志』に簡単な伝記が残されているだけである。

司徒師坦。号空山、金壇人。幼慕清虚、學道於茅山崇禧觀。理宗聞其名、召至闕。祈禱有應、賜號洞微先生。
就茅山建元(玄)壇、俾為民祈福。屢有宣賜、念不可忘本、乃以前後所得宸翰、敕黃、道秩、繳奏乞移恩三茅
君、從之。(中略)年七十六羽化。

これによれば、司徒師坦は茅山の近くの金壇出身であり、崇禧觀で修行をした。その後、その評判が理宗の耳に
入り、朝廷に召された。祈祷すれば靈驗があり、洞微先生という称号を下賜された。また、茅山に壇を作り、民の
幸福を祈ったという。そして、三茅君への加封を実現したことも記されている。伝記の末尾に七十六歳で死去した
というが、その生没年は不明である。ただし、咸淳三年(一二六七)に記された『三茅真君加封事典』(以下に詳
述)の序文には「君すでに仙去す」とあり、当時すでに死去していたようである。

同書にみえる淳祐年間の称号は「特賜洞微先生・右街鑿義・主管教門公事・佑聖觀虚白齋高士」である。この称
号から、上述の伝記に少し情報を加えることができる。称号のうち、「右街鑿義」という部分からは、司徒師坦が道
官に任命されることが分かる。¹³⁾次の「主管教門公事」は具体的な職掌は不明であるが、おそらく道士や道観に関する

問題を裁定するものであったと考えられる。道士としての知識や経験を評価されてこの職についていたのである。そして一番注目すべきは、最後の「佑聖觀・虛白齋高士」の部分である。上述の伝記によれば司徒師坦は理宗によって朝廷に召されて、臨安に進出した。その際、司徒師坦がどのような待遇を受けていたのかが知られる。この佑聖觀については『咸淳臨安志』卷十三「佑聖觀」の項目に以下のように記されている。

在興禮坊内。孝宗皇帝舊邸。紹興十六年、以普安就外第時建。明年、誕生光宗皇帝。乾道四年、寧宗皇帝、又開甲觀之祥。淳熙三年、詔改為道宮、以奉真武。紹定間、重建門曰佑聖之觀。殿曰祐聖之殿。藏殿在西廡、曰瓊章寶藏。皆理宗皇帝御書。(中略) 又御書黃庭經以賜、皆刻之石。後殿奉今上皇帝元命。(中略) 延真館在觀之西、有道紀堂・虛白齋。

この道觀は真武神を祭祀するものであり、神の称号である「佑聖真君」から名前を取っている。また、上皇の元命神も祭祀していた。佑聖觀には道士の居所として延真館が併設されており、そこには虚白齋という施設があった。司徒師坦の称号に「虚白齋高士」とあるので、臨安ではそこに所属していたと思われる。この佑聖觀は宋朝の皇帝のために皇帝の本命星などの祭祀を行う「御前宮觀」のひとつであり、一般の道觀よりも一段ランクが高い道觀であった。

また、「高士」とあるが、これは南宋時代特有の道士の地位である。葉紹翁『四朝見聞録』卷三丙には「高士」という項目があり、「孝宗聖性超詣、靡所弗究厥旨、尤精内景。時詔山林修養者入都、置之高士寮。人因稱之曰某高士」と概括されている。これによれば、「高士」の制度は孝宗の時に設立されたもので、地方の道士が臨安に招

聘された際に「高士寮（高士齋）」が居所となったようである。そこに所属する道士は、居所の名前にちなんで「高士」と称されたのである。司徒師坦の所属した虚白齋も高士寮であつたらしく、「虚白齋高士」と名乗っていたらしい。つまり、司徒師坦は茅山の崇禛觀で修行した後に理宗に「高士」として拔擢され、臨安に進出した道士だったことが分かる。当然、理宗皇帝とも強いつながりを持っていたと推測される。

理宗が司徒師坦をどのように知ったのか、またいつ臨安に招聘したかは正確には分からないが、司徒師坦が臨安の拠点としていたと考えられる佑聖觀は紹定年間（一二二八～一二三三）に施設の整備が行われているので、道士の居所である延真館の整備も行われたと推測される。よって、それ以降に臨安に来た可能性は高いであろう。また、茅山での加封儀礼が淳祐九年に行われていることから考えると、少なくとも淳祐年間の初めには臨安の佑聖觀に「高士」として招聘され、理宗の強い信頼を勝ち得ていたと考えられる。その司徒師坦が主導することにより、淳祐九年の三茅真君への加封が実現したのであつた。

六、『三茅真君加封事典』の概要

淳祐九年の加封についての資料が集められているのが『三茅真君加封事典』である（以下、『加封事典』と略称する）。以下、この資料にもとづき加封について明らかにしていくが、その前に同書の概要について述べておきたい。同書は『正統道蔵』の洞真部・譜録類に収録されており、ほかの版本は存在していないようである。著者の張大淳による序文の奥付は「丁卯」としか記されていないが、内容から南宋末期の咸淳三年（一二六七）に相当すると思われ、その頃に編纂されたことが分かる。

作者の張大淳については詳しい伝記資料が存在しておらず、その生涯については不明である。ただし、序文に載せられた肩書である「特賜冲靖明真微妙大師・特差充茅山山門道正・權知崇禧觀・管轄本山諸宮觀・賜紫」を見ると、張大淳は宋朝から「大師」の号を賜った、茅山の崇禧觀に所属する道士であり、茅山を管轄する道官（道教を管轄する官吏。道士が任命された）であったことが分かる。つまり、当時の茅山の実務をつかさどる道士として、大きな権限を持っていたと思われる。

上述したように、この書には淳祐九年に行われた、茅山の主神である三茅君への加封の儀礼にまつわる資料が集められている。巻上には淳祐九年正月に発給された尚書省の劄符に始まり、加封が行われた四月までの関連する行政文書、および加封を主導した道士の司徒師坦による上奏文、そして加封の際に使われた祝文が収められている。巻下には「進封三茅真君聖号慶礼醮科儀」という科儀書と理宗皇帝による「皇帝設醮青詞」などの三篇の青詞が収められ、儀礼の様子をうかがうことができる。さらに、三茅君への加封が行われた後、加封が無事に行われたことに謝意を表する司徒師坦の「奏謝加封祖師真君礼表」などの文書がつづき、加封が行われた経緯を石碑に刻むことを希望する淳祐九年十二月の「進加封告碑表」で終わる。

つまり、『加封事典』は淳祐九年の一年間を通じた、三茅君の加封に関する資料を収集したものと見える。茅山を管轄する張大淳はこの書の編纂を通して、三茅君の加封が宋朝の公認のもとに行われたことを確認し、三茅君を祭祀する役割を持つ茅山の権威付けをはかったと考えられる。また、張大淳の師は上述した司徒師坦であり、司徒師坦の功績を顕彰する意図もあったと思われる。

この文献はふたつの意味で貴重な資料といえよう。第一に、巻上に収録されている当時の行政文書から三茅君の加封が実現するまでのいきさつが詳細に復元できることである。この資料により、宋代における道教の神に対する

賜号について理解を深めることができるであろう。

第二に、巻下の科儀書によって、宋朝が道士に行わせていた正式な儀礼がどのようなものか分かることである。宋代の歴代皇帝は道教を信奉し、道士に祭祀儀礼を行わせていた。しかし、実際の儀礼のプログラムがどのようなものであったのかを示す資料は少ない。『加封事典』巻下には、加封の際に行われた齋醮儀礼の科儀書が収められている。これにより、南宋時代の国家公認の道教儀礼の一端を知ることができるのである。以下、この資料に依拠しながら、淳祐九年の加封について明らかにしたい。

七、三茅真君への加封の経緯

本節では『加封事典』巻上によって、淳祐九年の三茅君への加封が実現した経緯をたどってみることにしよう。¹⁵⁾以下、巻上に収録された宋朝の発給した文書と、司徒師坦の上奏文によって、加封の過程を復元することにした。まず加封の経緯をまとめると以下のようになる。

◎淳祐九年（一二四九）

【二月】

・司徒師坦が「左街道録・主管教門公事」に任ぜられる。（「尚書省劄」）

【二月】

・司徒師坦が就任を辞退する。（「辞免道録表」）

・ 辞退が許可されず。

・ あらためて左街道録に就任するよう、勅黄・省劄が一通ずつ発給される。（「内省公文」）

【閏二月】

・ 司徒師坦が左街道録に就任することを再度辞退。その代わりに、三茅君に加封するように要請。崇寧元年に三茅君が賜号された際の告勅の公式の写し（録白）を合わせて提出。（「乞加封表」）

・ 三茅君への加封が許可される。（「内省公文」？）

・ 司徒師坦が三度目の就任辞退。（「辞免第三表」）

【三月】

・ 三茅君への加封（二文字追加）が実現。尚書省から建康府と崇禧觀に劄符。（「省劄二道」）

・ 茅山の崇禧觀から、建康府に対して、加封があったことを確認。さらに管内の道正司と道觀に通知を出すように依頼。（「繳省劄申建康狀」）

・ 司徒師坦が醮の儀礼を行うことを建議（「交領加封省劄表」）

・ 司徒師坦が左街道録への就任を受諾。（「謝軫道録表」）

・ 司徒師坦に加封に際し、齋醮を行い、貢物をするように依頼。

・ 三茅君の新しい称号を記した告勅が三通下される。また、下賜される儀物も決定する。

（「告勅三道」「賜儀物」「威儀一十四事」）

【四月】

・ 加封の儀礼が挙行される。

※三茅君の祭祀に使われた「祝文」も記載される。「大峰祝文」「二峰祝文」「三峰祝文」

【六月】

・ 司徒師坦が加封に対する感謝を上奏。（「奏謝加封祖師真君恩礼表」）

【十二月】

・ 司徒師坦が三茅君への加封の経緯を石刻する旨を上奏。（「進加封告碑表」）

以上、淳祐九年の一年をかけて、三茅君に対する加封とそれに関する手続き、さらには加封を記念した石碑の作成までが行われた。宋代になると、石刻史料を中心に賜号や加封に関する資料も多くなるが、ここまで具体的に経緯が分かる例は珍しいと思われる。宋代の加封に関する貴重な資料といえることができよう。

この三茅君への加封は、少し変則的な発端から始まる。はじめに司徒師坦が左街道録への就任を要請され、それを辞退する代わりに三茅君への加封を行うよう朝廷に要請している。上述したように、司徒師坦は理宗とのコネクションがあり、確固とした地位を築いていた。おそらく左街道録への就任は前提として決まっており、辞退は形式的なものであったと思われる。左街道録への就任要請を契機として利用し、さらに加封も要求したのである。¹⁶

加封を実現するには、廬山の事例でも検討したように、霊験をあらわすなどの実績をアピールするのが常である。司徒師坦はどのように三茅君の加封をとらえていたのであるか。司徒師坦が加封を求めた「乞加封表」の内容を検討してみることしよう。

臣（作者注…司徒師坦）翳迹茅山、乃三茅真君成道之所、係第一地肺福地、第八華陽洞天。宮觀庵院、晨鍾夕

警、奉三君香火、爲國焚修、祝延聖壽、天下名山、於斯爲盛。爰自漢朝迄于我宋、或發三君之潛耀、或隆三君之美名、香火綿綿、不絕如綫。此蓋眞仙於是爲治職之地、國家於是植無疆之休。

司徒師坦はまず、茅山が三茅眞君の聖地であり、漢代から宋代に至るまで絶えず三茅君の祭祀が続いており、国家と皇帝の長寿を祈祷する場所であつたという。

臣不揣狂愚、欲乞以前後所賜巨高士鑒義、并今來所賜道録勅命、回降聖恩、照正一天師佑聖眞君近例、加封本山祖師三茅眞君徽號。

次に、司徒師坦は皇帝から高い地位の道官に任命されたが、自分に恩恵を与えるのではなく、先に賜号されていた張道陵の例にならつて、祖師である三茅眞君に加封を実現するように依頼する。

竊以茅氏之宗、仙源甚遠、大茅君盈、次固、次衷、兄弟三人、巖棲谷隱、精練道眞、累功積行、得道之後、領括羣仙、受事太極司命嶽府、考校乎吳越之境、留治乎赤城之山。

三茅眞君（茅盈、茅固、茅衷）が得道の後、神仙を管轄し、吳越の地域の司命神となつたことを述べる。

水旱雨雪、隨禱輒應。禍福吉凶、其驗如響。狼燧以之而息警、魚夢以之面考祥。臣自入山以來、每奉州縣禱祈、

其詳如此。

そして最後に、天候不順の際は祈祷すれば解決し、運命を操作する靈験があること、また司徒師坦自身も州県のために祭祀を行ってきたことを述べる。

宋朝は「水・旱・兵・疫」に関して靈験をあらわした神に賜号を行うことが多かった。この三茅真君に対する加封の際も、やはり「水・旱」への靈験が主張されている。また、茅山が国家に幸福をもたらすための祭祀を行う場所であったこと、また司徒師坦自身も祭祀を行ってきたことにもふれ、加封を実現すべくアピールしていたことが分かる。

八、加封の実施と儀礼の挙行

(一) 宋朝からの下賜品

司徒師坦の要請の結果、三茅真君に対する加封はまもなく宋朝に許可された。加封の儀礼に先だって、三月に宋朝から下賜される儀物の一覧が提示された。『加封事典』巻上「賜儀物」には、下賜された三茅真君の神像の装飾品が列挙されている。

沉香描金如意一事、係降真香柄黄羅袋、黑漆匣盛、鎖鑰全錫、獻大茅君像。

秉執玉圭二面、紅銷金袋各小朱紅匣盛、外大朱紅匣護、鎖鑰全錫、獻中茅君。

小茅君秉執織天尊綠錦幡二首、各長二丈。

大茅君の像には如意、中茅君の像には玉圭、小茅君には錦幢が裝飾品として下賜されている。小茅君の持つ錦幡が二丈（約六メートル）とされているので、三茅真君の神像はかなり大きいものであったに違いない。

続いて「威儀一十四事」という項目があり、儀礼の際に使うために下賜されたと思われる儀物が十四種列挙されている。具体的には、(一) 節一對五層、(二) 幢一對、(三) 旌一對、(四) 幡一對、(五) 五明扇一對、(六) 羽扇一對、(七) 如意一對、(八) 覃護威儀黃絹袋一十二箇、(九) 盛威儀朱紅木匣一隻、(十) 威儀黒漆立架二座、(十一) 沉香五兩、(十二) 腦子五兩、(十三) 新茶五十片、(十四) 銀一百兩、という品々である。

はじめの「節一對五層」の箇所に、

節一對五層、係五色線條鋪造。每層有銅管銅蓋子各一箇、上有六角寶蓋龍頭銜銷金彩幡六首、旛脚有銅鈴兒、每一節八十四箇、龍頭朱紅鞵子、下有銅箍。

とあるように、これらの儀物には華美な裝飾が施されていた。以下の儀物も同じく詳細に記載されている。これらの儀物からは、宋朝（理宗）がこの加封に非常に力を入れて援助を行っていたことが知られる。

(二) 儀礼当日の様子

加封の儀礼が行われたのは淳祐九年の四月二十三日であった。『加封事典』巻上には、当日の様子が以下のよう

に記されている。

四月二十三日甲子、集諸山市民、恭迎告勅、昭告三峰。時值連日風雨、二十二日、高士登壇上、急奏章借晴。次早五更鳴鼓集衆、宿雨即止、霽色開明、躬率本山諸宮觀主首道衆、庵寮道人、同鎮市士庶父老、出山祇迎亭、卓香花燵幢、旌旗鑼鼓、鏡鉢清樂、仙仗儀從、及本山常寧鎮官領兵率旗隊金鼓衛護約千餘人、遠近山居來觀者如堵。是日天氣清和、祥煙如畫、仙鶴鳴於晴空、白兔現於峰頂。先迎告勅、至崇禱觀門、高士率諸山主首道俗望闕謝恩、歡呼萬歲、次登大茅峰、奉行典禮、宣揚告命、敷獻寶器。次登中茅峰、小茅峰、儀獻如前。

これによると、儀礼の前は連日風雨があったため、司徒師坦が上章の儀礼を行った。その結果、雨はやみ晴れ渡ったという。そして、茅山の道觀の住持や道士、茅山のある常寧鎮の地元民たちが加封の命令を記した告勅を出迎えた。常寧鎮から儀仗兵が派遣され、見物人も非常に多かったという。崇禱觀に告勅が到着したのち、道士も俗人もそろって理宗皇帝が加封したことに謝恩した。まず大茅山に登り儀礼を行い、三茅真君に「宝器」（おそらく上述の供物）を献上した。続いて中茅山、小茅山でも儀礼を行ったという。『加封事典』巻上の最後に収められている「大茅祝文」「二茅祝文」「三茅祝文」は三茅真君を表彰するものであり、それぞれの山で読み上げられたものであろう。

この記述からは、加封の命令を記した告勅を出迎えることはとても大がかりなイベントであったことがうかがえる。また、茅山の道士たちだけでなく、地元の住民も参加し、常寧鎮の地方政府も巻き込んでいたことが分かる。

(三) 儀礼のプログラム

『加封事典』巻下に収録されている「進封三茅真君聖号慶礼醮科儀」と「慶礼設醮儀」は、淳祐九年の加封に際して行われた儀礼の科儀書である。儀礼が行われた四月二十三日はこの科儀書にもとづいて儀礼が挙行されたのであろう。以下に「進封三茅真君聖号慶礼醮科儀」と「慶礼設醮儀」のプログラムがどのようなものか紹介してみよう。

〔進封三茅真君聖号慶礼醮科儀〕

(一) 発爐？（儀礼如常）

天への使いとなる道士の体内神を呼び出すもの。後半に「復爐」の項目があるので、それと対になる「発爐」が行われたと思われる。

(二) 啓聖

宋朝がさまざまな神を祭祀して幸いを得ていること、茅山が神仙の居所であること、それゆえに理宗朝が加封を決定したこと、その意を受けて齋醮を行うことを述べる。

(三) 宣詞（三捻上香）

大茅君を供養し、その道力で皇帝が長生することを祈る。

中茅君を供養し、その道力で皇后を言祝ぐことを祈る。

小茅君を供養し、その道力で民衆を加護することを祈る。

(四) 大謝

今回の加封について述べる。

(五) 十二願

詳細は記されていないが、『太上出家伝度儀』や『金籙斎投簡儀』など、宋代に編纂された科儀書にみられる項目である。

(六) 復爐

「常儀の如し」とあり、詳細は書かれていない。

〔慶礼設醮儀〕

(一) 衛靈呪

(二) 発爐

「常式の如し」とあり、詳細は書かれていない。

(三) 出官

「常式の如し」とあり、出官の儀礼自体の詳細は書かれていない。

三茅君の加封を皇帝の命で行うこと、「青詞一通を拝上」して、功曹使者たちが天に報告しに行くことを述べる。

(四) 各称法位

三茅君の来歴を述べて表彰し、皇帝から美称を下賜されたので、儀礼を行うことを神々に告げる。

(五) 請聖

三茅君を儀礼の場に招くものと思われる。

(六) 三献 (初献)

茅山の祖師である三茅君の来歴と、人々と国家を守ってきたことを述べる。そして、今上皇帝が信仰をして道士たちに祭祀を行わせることを述べる。

(七) 三献 (亜献)

三茅君を表彰し、今回の儀礼を行うことにより、三茅君が衆生に利益をもたらすことを祈る。

(八) 三献 (終献)

神々が儀礼の場に降臨したことをねぎらう。

(九) 送聖

詳細不明。醮席に招いた神々を天界に帰還させるものと思われる。

(十) 内官

(十一) 復爐

(二) (三) と対応するもの。「常儀の如し」とあるだけで、詳細は記されていない。

その後、さらに三つの青詞（「皇帝設醮青詞」「内省張都知醮詞」「崇禧觀醮詞」）が付されるが、儀礼のどのプログラムで使用されたのかは明確に記されていない。ただし、(五) 請聖の願文に「設醮青詞、謹當宣奏」とあるので、少なくとも「皇帝設醮青詞」はそこで読み上げられた可能性が高い。

この「進封三茅真君聖号慶礼醮科儀」と「慶礼設醮儀」をほかの科儀書と比較した場合、特に変わった儀礼の項

目はないようである。オーソドックスな齋醮の形式を使い、願文の部分だけ加封に特化させたものと考えられる。¹⁵しかし、この科儀書については、二つの特色があるといえる。第一に、伝統ある道教の聖地・茅山の道士によって作成されたと思われること。第二に、宋朝の承認のもとに行われた、いわば国家公認の道教儀礼で使われたものという点である。以上の二点の理由により、この科儀書は加封という少し特殊な状況で使われたものではあるが、当時の道教儀礼の規範的なプログラムが窺えるという点でも非常に貴重な資料ということができよう。

九、小結

本稿では南宋時代における道教の神に対する加封と、それに伴う儀礼について考察した。その結果、廬山と茅山の事例では、一般的な民間信仰の神と同じく、「水・旱・兵・疫」による災いを避け、国家を保護する靈験をしめたことを表彰するため、それぞれの主神である九天採訪使者と三茅君へ加封を要請していたことがわかった。さらに、南宋とモンゴルの戦争や、理宗皇帝と道士のコネクションなどの同時代的な背景も存在していることも明らかにした。

さらに、廬山における加封の際には靈宝道場（靈宝齋）や醮などの道教式の儀礼が行われ、茅山における加封の儀礼では新規に科儀書が作成されたことも述べた。茅山における加封に際して作成された儀礼書は、国家祭祀と道教儀礼が融合した、興味深い事例であるといえよう。宋代における国家祭祀と道教については、また機会をあらためて検討することにした。

注

- (1) 本稿は二〇一五年に香港中文大学で開催された、「比較視野中的道教儀式」国際学術検討会での発表、および予稿集に掲載された論文の内容をもとに加筆・修正したものである。当初、学会の論文集が出版される予定であったが、諸事情により遅れているため、日本語版を先に発表することになった。この場を借りて、日本語版の発表を許可して下さった呂鵬志先生にお礼申し上げたい。また、学会発表当日のコメントーターであり、ご批評いただいた張超然先生にもお礼申し上げたい。また、学会発表の前後に小林隆道氏と意見交換を行い、本稿にもその成果が反映されている。小林氏にもこの場を借りてお礼申し上げる。
- (2) 宋代の賜号については、松本浩一「宋代の賜額・賜号について——主として『宋会要輯稿』にみえる史料から」（野口鐵郎編『中國史における中央政治と地方政治』（昭和六十年度科研費報告）所収、一九八六年。のちに『宋代の道教と民間信仰』汲古書院、二〇〇六年に再録）、Valerie Hansen *Changing Gods in Medieval China, 1127-1276*, Princeton University Press, 1990: 須江隆「唐宋期における祠廟の廟額・封号の下賜について」（『中国——社会と文化』第九号、一九九四年）、同「熙寧七年の詔——北宋神宗期の賜額・賜号」（『東北大学東洋史論集』第八輯、二〇〇一年）など同氏の一連の論考を参照。
- (3) 翊聖保德真君については、劉枝萬「天蓬神と天蓬呪について」（秋月觀映編『道教と宗教文化』所収。平川出版社、一九八七年。同『台湾の道教と民間信仰』に再録。風響社、一九九四年）、中嶋隆蔵『軒轅本紀』と『翊聖保德真君伝』——北宋真宗時代、読書人層に於ける道教思想の一面——（『東北大学文学研究科研究年報』第五十一号、二〇〇二年）を参照。九天司命上卿保生大帝は、真宗の崇道政策の中で生み出された神である。楠山春樹『道教における黄帝と老子』（『日本中国学会創立五十周年記念論文集』所収。汲古書院、一九九八年）や福島正「天書始末記」（『中国思想における身体・自然・信仰』坂出祥伸先生退休記念論集）所収。東方書店、二〇〇四年）を参照。
- (4) 理宗の道教信仰については、唐代劍『宋代道教管理制度研究』（綏装書局、二〇〇三年）と汪聖鐸『宋代政教關係研究』（人民出版社、二〇一〇年）を参照。

(5) ただし、『華蓋山浮丘王郭三真人事実』巻二にも、同じく嘉熙元年に理宗が三真人の賜号を命じた際の「理宗皇帝加封浮祐・正祐・顯祐真君詞命」が残されているが、そこには世継ぎを求めるような記述は無い。

(6) 理宗の伝記については、何忠礼『南宋史稿』（杭州大学出版社、一九九九年）などを参照。

(7) 九天採訪使者への信仰については、横手裕「佐命山三上司山考」（『東方宗教』第九十四号、一九九九年）を参照。

(8) 宋とモンゴルの戦争については、陳世松・匡裕徹・朱清沢・李鵬貴『宋元戦争史』（内蒙古人民出版社、二〇一〇年）を参照した。

(9) 三茅君の伝説については、小南一郎『中国の神話と物語り——古小説史の展開』（岩波書店、一九八四年）を参照。

また、茅山の宗教的な景観については、陶金「茅山宗教空間の秩序・歴史的発展のコンテキストの探究と再建」（『洞天福地研究』第四号、二〇一三年）を参照。

(10) 道教の聖地としての茅山の歴史については、楊世華・潘一徳『茅山道教史』（華中師範大学出版社、二〇〇七年）を参照。天聖四年（一〇二六）に、宋朝は道教祭祀を行う費用と負担の軽減のため、二十箇所の聖地を選び、ほかのところでは祭祀をとりやめることにした。『東齋記事』巻一や『清波雜誌』巻九には、その際に選ばれた聖地が列挙されており、宋代に重要視されていた聖地を知ることができる。その中に茅山にある道教の聖地（洞天）である「華陽洞」も含まれており、これは実質的には茅山を指しているといえよう。『続資治通鑑長編』巻一百四にも「天聖四年十二月）辛巳、道録院上所定名山洞府歲投龍簡者二十處、餘悉罷之。」とあり、投龍簡をする場所を道録院が定めたことが記されている。

(11) この称号は『加封事典』巻上「省割」二道にみえるものである。同書巻上「元封告勅」では、三茅君の北宋時代の称号はそれぞれ「太元妙道真君・東嶽上卿司命神君」、「定録冲靜真人」、「三官保命冲慧真人」とされており、（おそらくは省略のため）字数が少なく、さらに末尾が異なっている。大茅君は「真君」、中茅君と小茅君は「真人」となっており、大茅君だけがちがっている点に注意したい。上述の王古による規定によれば、道教の神仙の称号では「真君」のランクが上、「真人」が下とされており、大茅君だけが上位の神仙とされていた可能性がある。また、中茅君と小茅君が北宋時代に「真人」だったのが、南宋に「真君」に格上げされた可能性も出てくる。資料不足によりどち

らが正しいのか決めがたいが、ここでは淳祐九年に加封が実現した際に提示されているものをあげておいた。

- (12) 理宗の時代、茅山における上清経籙の伝承者のトップである「宗師」の地位を、金華出身の道士・朱知常が篡奪する事件が起きた。司徒師坦は朱知常を理宗に紹介し、いわばその篡奪事件の引き金・後ろ盾となった道士でもあった。そのため、南宋時代の茅山の大道道士であるにもかかわらず、宗師を中心に茅山の歴史を記した元代の『茅山志』には二回しか登場せず、伝記も収録されていない。拙稿「被篡奪的茅山宗師之地位」(『華人宗教研究』第十期、二〇一七年)はこの事件の背景を明らかにしたものであり、本稿の姉妹編である。合わせて参照されたい。

- (13) 宋代の道官制度については、前掲の唐代劍『宋代道教管理制度研究』を参照。

- (14) 高士の制度については、前掲の唐代劍『宋代道教管理制度研究』と汪聖鐸『宋代政教關係研究』、注12前掲の拙稿を参照。

- (15) 小林隆道「南宋淳祐九年における茅山加封文書の発出過程―『道藏』所収『三茅真君加封事典』を分析対象として―」(『宋代史研究会編』『宋代史料への回帰と展開』汲古書院、二〇一九年)において、宋朝が発給した文書の流れから加封の経緯がより詳しく復元されているので、そちらも参照されたい。小林氏の論考は文書行政史の観点から『加封事典』の研究を進めた成果である。

- (16) 注15前掲の小林氏の論文によれば、役職への就任を三回辞退するというやり取りは一般的な官僚と同様だったようである。また、小林氏は、宋朝と司徒師坦の間のやり取りに関連していたのが宦官の張延慶であり、加封についても司徒師坦と張延慶の間ですでに話がついていたと推測している。また、張延慶が祐聖観の提点をしていたことから、祐聖観にいた司徒師坦と関わりを持つようになったと考えられるという。さらに、同論文では、張延慶は上述の廬山における加封にも関与していたことも指摘されている。なお、注12前掲の拙稿でも、宦官が御前宮観を管轄していたことから、そこにいる道士と接点を持つことがあったのではないかと推測した。合わせて参照されたい。

- (17) 宋代の齋醮儀礼については、張澤洪「宋代道教齋醮」(『宗教学研究』一九九六年第一期)を参照。